



グローバル化論以降の社会理論 : U・ベックの「コスモポリタン化論」構想

大川内, 晋

(Citation)

社会学雑誌, 41:193-206

(Issue Date)

2025-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100503819>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100503819>



《投稿論文》

グローバル化論以降の社会理論

—— U・ベックの「コスモポリタン化論」構想 ——

大川内 晋

神戸大学人文学研究科学術研究員

本稿のねらいはウルリッヒ・ベックのコスモポリタン化論（以下、CT=Cosmopolitanization Theory）の展開における立場の変化を再検討すること、今日における理論的意義を確認することにある。具体的にはCTが規範理論的ないし批判理論的側面を強く持ちながらも、ベック自らがこの立場を棄却したことに焦点を当てて、この問題はすでに先行研究で提起されているが、しかし、なぜベックが規範理論の棄却にこだわっていたのかについては十分に検討されていない。むしろ、こうしたベックの曖昧な立場が理論的限界を招いたという批判的な見解もある。それに対して本稿はこのベックの立場を問い直すことで理論的な発展可能性を見出す。その手がかりとしてベック社会学全体に通底する「反省」的自己言及に対する「再帰」的自己言及と副次的帰結という原理がCTにおいても共有されることを明らかにする。その上でCTにおける副次的帰結がもたらす意味を「変態（Metamorphosis）する世界」の議論に接続させて論究することで「社会を地に根付かせる」というCTが見据えた景色を提示したい。

一 はじめに

近年の人文社会諸科学において、グローバル化によって生じる諸問題への対応を目的と

してコスモポリタニズム論が企図された。それは三つの立場に大別される。第一に新自由主義的なグローバル化が

招く他のなシヨナリズムやローカリズムを排して、普遍主義的な人間像の構想にコスモポリタニズムを活用した立場（Nussbaum 1996=二〇〇〇）、第二にその理論的かつ実践的非現実性の観点から文脈を限定することに活路を見出そうとした立場（Harvey 2009=二〇一三）、第三にこれら二つの立場から離れてグローバル化以降の全体社会の変容

をコスモポリタン化という過程として説明しようとした立場である。

本稿はグローバル化以後の社会変容を見るべく第三の立場に依拠するウルリッヒ・ベックのCT³に着目する。ベックはCT構想の初期段階で自らがグローバル化と呼ぶ新自由主義的ないし市場原理主義的グローバル化のヘゲモニーに対抗する理論としてもコスモポリタン化の意義を唱えた³。加えてCTはナショナリズムにも対抗するものだととして、経済にとどまらない社会の再構成がトランスナショナルな次元で生じていることを根拠に挙げる。こうしたグローバル化を批判する規範を理論に内在させる一方で、コスモポリタン化という過程が現実に行進しつつあることを強調する。

コスモポリタン化とは、政治や経済や日常生活が基本的に国民国家の準拠枠のなかで定義される社会形態から、国民国家が内側から変化し世界リスク社会の輪郭がますますはつきりとあらわれる社会形態への変遷のことを指す。この言葉でいわんとしていることは、グローバル化やトランスナショナル化以上のこと、国々や諸大陸の間の結びつきの量的増大以上のことである。コスモポリタン化が意味することは、国民国家やエスニシティや宗教や政治といったものの分断線と

支配関係をこえて織りなされる、個々人間や諸集団間そして諸国民間の経済的、政治的そして倫理的な相互依存のことであり、この相互依存は一種の強制的な運命共同体を形成する (Beck und Beck-Gernsheim 2011 = 二〇一四・一〇五―六)。

以上からCTの構想にあたりベックがグローバル化とは異なる次元の社会変容を捉える明確な意図があることは読み取れるが、その一方でCTとグローバル化との差異の不明瞭さが顕在化する。そのことはベックの理論展開には立場上の「ゆらぎ」があったことを示している。当初は第一の立場に根ざして理論構築を試みたのち、次第にその立場を批判する第二の立場へと移行しつつ、最終的にはその立場からも離れて第三の立場に移行して立論を目指した (Beck 2002a, 2002b = 二〇〇八・2004 = 二〇〇六・2008 = 二〇一一・2011b)。この立場のゆらぎはCTの説得的な理論展開を困難にさせてきた。これについてはすでに批判的な検討がなされているが、それではなぜベックが規範理論から脱却することに固執していたのかについては十分に検討されてきたとは言い難い。

そこで本稿はベックがCTにおいて最終的に規範理論としての立場を退けて理論構築を目指したことの意義を確認することで、その理論的不全よりも社会の構想としての新

たな可能性に目を向けるための礎を築きたい。そして、その手がかかりをベックが自らの社会学を基底する再帰的近代化論に求める。さしあたり本稿ではつぎのような流れで論考を進める。まず、CTへの先行研究を通して論点の一層の明確化を図ったのち、さらなる説得的な理論展開をベックの社会学のなかに位置付けなす作業に求める。そして、この再文脈化をもとにベックがCT構想の先にみた社会の構図を最後の全体社会の分析である「変態する世界」に接続させつつ論考する。

二 CTの構想と規範理論

二・一 「諸実践」を反映する理論なのか、あるいは「変革」の理論なのか

デヴィッド・ハーヴェイはベックのCTを含むコスモポリタニズム論全体に通底する問題としてそれが「今日における諸実践の現実を反映したものか、それともその現実に批判的に関与し、望むらくはそれを変革するものなのか、その二つのアプローチをしばしば融合させている」と指摘した上で、CTが新自由主義のヘゲモニーに対抗する理論として構想されたにもかかわらず、むしろ新自由主義の原理に基づく構造をなしていることを批判する (Harvey 2009 = 二〇一三: 一五一)。その根拠としてベックの近代

化論では第一の近代が「集団性、領土性、境界という原理に依存」しているのに対して、コスモポリタニズムが進展する第二の近代は「人民」や「国家」といった集団的主体としてよりも個人としての人権の担い手に依拠しており、すなわちベックのコスモポリタニズムを根拠づけているものが個人的人権の普遍主義であると指摘する。

その上でベックが「真」と「偽」のコスモポリタニズム (Beck 2006) といった恣意的な分類を行っていることを問題視する。結局のところ新自由主義的グローバル化と帝国主義のヘゲモニックな理論と実践がコスモポリタニズムの実践とどのように交差しているのかをベックは説明できておらず、その結果として革命的な政治的プロジェクトを構想できないために、「人道主義的に倫理を説くこと」と「政治が可能とされる唯一の地平として自由民主主義の立場から人権を偶像化すること」に限定されてしまうと述べる。それはすなわち現代のコスモポリタニズムが階級支配と金融的・軍事的帝国主義のヘゲモニックな新自由主義的实践を覆い隠す倫理的・人道主義的仮面以外の何ものでもない結論づける。

二・二 CTに内面化された規範理論への評価

以上のようなCTにおける構造的な問題は規範理論としての構想に収斂される。鈴木弥香子はCTに「規範的コスモ

ポリタニズム」と「記述的コスモポリタニズム」という区分けがある上で著作によって立場が揺らいでいるとその両義性を認めつつも、規範的議論を忌避してプロセスを強調することで、実際にコスモポリタニズムが実現されているという議論にスライドさせる傾向にあると指摘する（鈴木二〇一四・二〇一九）。そして、この規範理論としての可能性を忌避したことがCTにとどまらず、コスモポリタニズム論全体が抱える理論的行き詰まりの要因として批判する。その上で他者性の問題を主題に「反省的自己変容」という他者なしで自らが存立しえないことを反省的に自覚する可能性に希望を見出し、規範理論としての再構築を企図する（鈴木二〇二三）。

その一方で、伊藤美登里はこうしたベックの診断理論と規範理論とあいだの「ゆらぎ」そのものがCTの独自性であると主張する（伊藤二〇一九）。伊藤はCTを診断理論に基づいて提示された「コスモポリタン化」、批判理論に基づきベックがあるべき理念を提案している「（狭義の）コスモポリタニズム」、方法論的な刷新を意図する「方法的コスモポリタニズム」の三つに分類する。その上でこの診断理論としてのコスモポリタン化と批判理論としての（狭義の）コスモポリタニズムとが明確に区分されるものではないために、CTの理解が困難であると同時に独自性があると解釈する。

そしてコスモポリタン化の概念が現実における機能という点で、単なる記述概念の域を超えていると主張する。それは「存在」について記述しながら、人々をベックが善いと考え「当為」へと促す働きをもつ。つまり、事実を分析する概念でありつつ、理想を実現する方途としても機能していると指摘する。その根拠にベックがコスモポリタン化の前提として布置する再帰的近代では、社会は目的—手段図式によって変革されるよりもむしろ副次的帰結として変容していく構造的特性を挙げて、社会の実態を記述し分析し発展の方向を示す行為それ自体がベックにおいては実践でもあると主張する。その上で、コスモポリタン化の概念を用いて第二の近代における社会の構造変化を記述しつつ、社会が副次的帰結として変化してゆく第二の近代へコスモポリタニズムを招来させようする彼の意図が存在したのではないかと結論づけている（伊藤二〇一九）。

二・三 コスモポリタニズムの亡霊からの解放

ここまで見てきたようにベックの理論的立場の非一貫性についてはすでに確認されているが、傾向としては新自由主義的グローバル化への批判理論的側面が構想の初期段階に色濃く反映されている一方で、後期の著作ではグローバル化との差異化やリスク社会との関連性を強調し時代診断理論の側面が前景化している（Beck 2002a, 2002b）。

二〇〇八、2004=二〇〇六、Beck 2008=二〇一；Beck und Beck-Gernsheim 2011=二〇一四）。それを示すものとして「コスモポリタンの」という修辭句を用いてたくさん概念を開発しながら、規範と記述のゆらぎのなかで「コスモポリタン化」という用語においても変遷があったことには留意しておきたい。構想初期の段階では「グローバリティ」だったのが「多次元的グローバル化」へ移り、その後「コスモポリタニゼーション」と称していたものを最終的に「コスモポリティゼーション」へと変更した。このことは「哲学的／規範的コスモポリタニズム」ではなくて「記述的コスモポリタニズム」として社会変容を捉える概念にこだわった思考の痕跡を示している（Beck 1997=二〇〇五、2002b=二〇〇八、2004=二〇〇六、2016=二〇一七）。

それにもかかわらず、ではなぜベックが規範理論を棄却して時代診断理論としてCTを構想することにこだわったのかについては未だ十分に問われていない。ベックが規範理論を棄却したことを批判する指摘もあるが、本稿ではこうしたベックの態度は決して規範理論の重要性を軽視したのではなくて、むしろ規範理論の志向性をあまりにも強く持ったために「ゆらぎ」を避けられなかったという見解を主張したい。三上剛史はポスト社会的な今日の状況を前提にベックがCTの展開に際して、デュルケム／パーソンズ図式から一旦離脱しながらも、個人と社会を接合するに

あたり、緩やかなコスモポリタニズムという規範的要請を用いる点でデュルケム／パーソンズ図式への回帰（規範化ないしは標準化を伴うプログラム性に依拠すること）があるのではないかと指摘する。そして、ポスト社会的な状況における個人と社会の離反関係において、ニクラス・ルーマンらと比較してベックの場合は個人が分割可能でありなおかつ擬似主体であると認めながらも、社会の構成要素が不明瞭であると付け加える。かくしてCTが統合なき社会を捉えるためには規範理論からの離脱の必要性があると説いている（三上二〇一・四七）。

以上の先行研究の動向を踏まえた上で本稿が目指すのは規範理論を棄却した意味を問い直し、記述的概念としての限界と可能性を模索することでグローバル化論から差異化されうる理論的意義を確認することにある。こうした手続きはすでに一部が鈴木によつて達成されているように思われる。しかし現代社会の相互依存状態における「反省的自己変容」を求める限り、この論理は新自由主義の隠れ衰として機能するというハーヴェイの批判を克服できない。つまりCTの持つジレンマを継承している（鈴木二〇二三）。また、伊藤の指摘ではCTの独自性があくまでもその方法的立場に限定されている（伊藤二〇一九）。それを踏まえてCTがどのような社会を描写しうるのかについてベックのその独自性を担保しつつ確認

されねばならない。規範理論から離脱してCTが何を記述することが可能なかを提出することでその理論的意義を問う直すこと——コスモポリタニズムの亡霊に囚われたベックを解放する——をなくしては、冒頭で分類したコスモポリタニズム論のなかで差異化されるCTの独自性はその立脚点をたちまち失ってしまう。つまりマーサ・ヌスバウム(1996=2000)らが引き継いでいるとされた普遍主義の地平をCTもまた共有しているということであり、革命的な政治的プロジェクトを構想できずに「人道主義的に倫理を説くこと」と「政治が可能とされる唯一の地平として自由民主主義の立場から人権を偶像化すること」に限定されてしまうというハーヴェイの批判に曝され続けることを意味する。したがって、コスモポリタン化の概念を規範理論に依拠することなく定式化することは、ベックの企図を二重の意味で救うための試論である。

三 再帰的近代化の最終局面としての「コスモポリタン化」

三・一 再帰的近代における「反省」と「再帰性」の区別

ベックは自らの社会学において再帰的近代化論を基底的な理論として布置しており、その下にCT、リスク社会論

と個人化論の三つの複合的な議論群を並列させて、これらが相互に結びつきながら強化しあうと主張する(Beck 2008=2011: 101)。また、コスモポリタン化は再帰的近代化に関する現時点での将来に対する予想であるとも述べている(Beck 2011b: 15)。では、このベック社会学全体に通底する原理とはなにか。それは「副次的帰結」にある。再帰的近代化論についてはアンソニー・ギデンズとスコット・ラッシュュとの共著がよく知られているが、ここでは再帰性をめぐる両者との理論の立脚点の相違についてベックは以下のように説明する。

私は、ギデンズと違い、またラッシュュと対照的なたちで、一見逆説的と思えるかもしれないが、知ではなく非知こそが「再帰的」近代化の媒体であるという命題を主張している(Beck et al 1994=1997: 320)

さらに、ベックにとって知と非知の区別は「反省(Reflexion)」と「再帰性(Reflexivity)」の差異に関わる。川端健嗣はこの論点についてベックの論考をまとめつつ、ベックが自己言及の低位二類型として意識的な自己言及としての「反省」と無意識な自己言及としての「再帰性」を区別しており、「科学的知、専門的知、日常的知」を通じて自然のみならず人間やその生活自身に意識的な変化をも

たらず反省的近代化と、「副作用」として「知識や意識のおよばない内在的なダイナミズム」で人間や生活に変化をもたらす再帰的近代化との差異がギデンズやラッシュュとの理論的立脚点の相違であるとして説明する (Beck et al 1994, 川端二〇一六)。

つまり、ベックの再帰的近代化では「反省」ではなくて「再帰性」を原理としており、それは原則として非知を媒介に認識がなされていくために「副次的」帰結に行き着くのである。そうであるならば、再帰的近代化を構成するリスク社会、個人化がそうであるように同じくコスモポリタン化も「反省」ではなくて「再帰性」がもたらした副次的帰結でなければならぬ。だからこそ、コスモポリタン化は反省的自己言及による社会変容としての「コスモポリタニゼーション」ではなくて、再帰的自己言及による社会変容としての「コスモポリティゼーション」となる。したがって規範理論は棄却される。

ではコスモポリタン化は何の副次的帰結として進展するのか。これについて伊藤はイーシャイ・ブランクのCT構想には媒介者が欠けているという批判 (Blank 2011=2014)を手がかりに、上記の論理から再帰的近代では社会変革の主体による達成の困難性を指摘する。つまり、主体の企図とは別のところで副次的帰結へと導かれるためである。本稿の主眼が規範理論を棄却してコスモポリタン化の概念を

説明することにある以上、ベックが自ら社会変革の主体としてコスモポリタニズムを企図することに終止せず、コスモポリタン化は何の副次的帰結として生じるのかが問われなければならない。

三・二 問いの転換「気候変動は私たちをどのように変えるのか？」

そこで鍵となるのがリスク社会における二つの局面のうち、個人化に対してもう一つの局面としての生態学の危機である。ベックは「世界の変態」のなかで世界が変動あるいは変化するのではなくて変態することである要因として気候変動による地球環境の不可逆的な変容をあげている。「変化」は一部のみ変わって他は同じもので、「変動」はその社会学的概念それ自体や視座の確実性は維持されたままであるのに対して、「変態」は世界がこれまでとは一変し、またそれを見るための道具立ての確実性を喪失するといった再帰的近代の副次的帰結の論理を表現している。その核心的な課題が気候変動である (Beck 2016=二〇一七)。

気候変動という世界的なリスクは、一種の強制力のある集合的記憶である。現在私たちがさらされているものの中に過去の意思決定や過ちが内在しているという意味で、また、制度として最大限に物象化したもの

でさえ、覆される可能性のある物象化にすぎず、それが自らを危機にさらすことになるとしたら、変更が可能であり、変更されなければならない、借り物の行為様式にすぎないという意味で。気候変動は、継続中の産業化の全期間の過ちが物象化されたものであり、気候のリスクは、全滅の可能性というありつただけの破壊的な力をふるい、認知と是正を求めている。それらは抑圧されていたものの集合的復活といったものであり、そこでは、国民国家政治という形で組織された自信満々の産業資本主義が、自らの存在自体に対する具現化された脅威という形で、自らの過ちに直面しているのである（Beck 2016＝二〇一七：四〇）。

ベックはこの気候変動への対処をめぐり、関連する課題について二つの枠組みがあると述べる。一つは規範的で政治的な「気候変動に対して、私たちは何ができるか？」という問いである。もう一つは社会学的で分析的な「気候変動は私たちに対して何をするのか？そして、社会と政治の秩序をどのように変えるのか？」という問いである。この問いの転換は気候変動という問題が近代化の副次的帰結であるという事実を示すだけでなく、CTに欠けていた社会変革の主体の登場を説明する。つまりベックが世界の変態と表現するように、気候変動は「気候変動に対して私た

ちは何ができるか？」という問いが反省的自己言及だとすれば、再帰的自己言及として人々や社会を変容させる行為主体である。

この問いの転換に基づいてコスモポリタン化がグローバル化と差異化されるのは、グローバル化が経済を中心とした目的―手段図式に従って駆動する国民国家を超える全体社会の形成に対して、コスモポリタン化はそのグローバル化の副次的帰結として変容していく社会変容を捉えている。見田宗介が「あらゆる障壁を打ち破りながら進展しつづけるこの「近代」という原理、その最後の純化されつづけた形としての〈情報化／消費化社会〉は、それが全世界をおおいつくした〈グローバルゼーション〉というまさにその事実によって、ここに初めて、この無限の発展の前提である環境と資源の両面において、地球という惑星の〈有限性〉と出会うこととなる」（見田二〇一八：ii）と表現しているように、コスモポリタン化はこの「有限性」が副次的帰結として認識される過程を説明する概念である。

四 記述理論としてのCTの再構成とその先にある景色

四・一 社会を地に根ざすこと

見田が述べた「地球の〈有限性〉との出会」いは、CT

における再帰的自己言及をよく表現している。この有限性との出会いが意味するのは「コスモス」という超越論的な秩序が生態学のない物質論的な次元で可視化されつつある段階にまできていることを示す。近代による資源の搾取はグローバル化を経て、副次的帰結としてわれわれに地球の有限性という認識をもたらした（まさにベックが再帰的近代化論で自然という対象の完全な吸収を持って、近代化は自らにそのベクトルを向けると主張したように！）。それはかつてピーター・Ｌ・バーガー（1967＝2008）がノモスの盾として宗教の力を借りてコスモスを措定したときから、今や単なるノモスの不確実性だけでなく、コスモスまでもが地球の生態学のない物質論的な有限性に依拠していることを顕在化させる。甲羅のない蟹としての現代社会では聖なる天蓋は崩落の危機に直面している。しかし、ベックが世界リスク社会や世界の「変態」で主張するのはこの副次的帰結が一種の強制力のある世界規模の集合的記憶として万人に影響するという論理である。

この数十年間、私たちは繰り返し、こうした規模の変態に直面してきた。ベルリンの壁の崩壊から、九・一一のテロ攻撃、世界中で起こっている破局的な気候変動、フクシマの原子炉災害、金融危機・ユーロ危機から、エドワード・スノーデンによって白日の下にさらされ

たデジタル通信時代における全体主義的監視によって自由が脅かされる事態まで、一連の（くだけた言い方でいえば）「どんなでもない出来事」において、である。私たちが直面するのはいつも同じパターンだ。つまり、その前には「まったく考えられない」と除外されていたことが起こっているのである——マス・メディアが伝えるため、世界中のどここの居間でも大方観ることのできる地球規模の出来事として（Beck 2016＝2017: x）。

この地球規模の集合的記憶はコスモポリタニズムが招来するための大きな要因と推察されるが、そうであるならばなおさらのことそれがグローバル化論から離別できるかが重要な論点となる。しかしながら、ここまでCTを記述理論として展開したなかで、先行研究で指摘されたようなコスモポリタニズムの物質的土台はすでに整備されていると捉えうる論理が依然として駆動している。それはグローバル化の副次的帰結としてコスモポリタニ化が進展するとするならば、その帰結が新自由主義的グローバル化の全面化だとしても容認しようという矛盾を引き起こしかねない。そうである限り、CTを批判的に検討した他の論者の到達点以上のことを論考するのは難しい。鈴木という「反省的自己変容」においても、ベック自らが社会変革に参与するなかで副次的帰結としてコスモポリタニズムを招来させる

という伊藤の指摘もベックと同様に樂觀的なビジョンによる最善の帰結以上のものではない。ベック自身においても理論的立場の「ゆらぎ」はこうしたジレンマのもとで生じたものだと考えられる。

四・二 「コスモスの再構成に向けて」

それでもなお、CTが現代社会を分析する上で理論的意義を持ちうるためにはやはり新自由主義的グローバル化に対する批判理論としての側面が記述理論としてのCTのなかで整理される必要がある。それは単にコスモポリタン化とグローバル化の差異だけでなく両者がどのように結びつくのかを示されるべきである。現状としてはそれを説明する道具立てとしてベック社会学から抽出できるものが資本主義社会における階級対立では財の（再）配分をめぐる不平等を解消できなかったものの、リスク社会においては（光化学スモッグなど）負の財が誰しもに共有されるために地球規模での連帯の可能性を生み出すものしかない。しかし、それも原子力発電所事故などリスクの配分をめぐる不平等は明白である。そうである以上、記述理論としてCTを精緻化する先に規範理論としての意義が問われている。

そこでコスモポリタン化がグローバル化以前とは全く別の社会変容を捉えるものだとしても、近代化の副次的帰結としての気候変動がわれわれの社会をどのように変容

するのかといった問題をCTが取り扱う際に、いかに近代化や新自由主義的グローバル化が接続するのかを視野に入れることの重要性を主張したい。コスモポリタン化の進展の鍵となる気候変動一つをとってみてもそれによるリスクの偏在は大きく、海面上昇で消滅の危機にあるとされる地域と他の地域の間で一枚岩としてのコスモスを描くのはまさに新自由主義的グローバル化の二の舞である。つまり、先の地球規模の集合的記憶は、これが決して共通の立場を目指す普遍主義として誤解されることがあつてはならない。⁽¹⁰⁾ そのため比較社会的な視点が求められる。むしろ、グローバル化の副次的帰結としてそれぞれが希求する複数のコスモスが情報社会や消費社会という現代社会の特性と相俟って瞬時に世界中に流布する過程のなかでどのように結びついていくのかを探究することにこそCTの意義がある。一般理論以後の統合なき全体社会の分析において、情報社会における即時的な諸コスモスの生成がどのように受容されているのか、その差異がどのようにに接続するのか。その点では連帯するどころか対立や分断が広がる昨今の状況についても、それが先鋭化していることそれ自体が複数のコスモスのイメージが接続する契機と捉える見方もできるだろう。

五 おわりに

本稿ではCTの構想に着目し、これまで十分に検討されてこなかったベックが規範理論を棄却しようと奮闘した学問的態度を受け止めて、CTを時代診断理論として再評価することを試みた。そのためにはコスモポリタン化がどのような社会変容を説明する概念であるのかについて、ベックの立場を活かしつつも同時に自身がそれを取りわけグローバル化との差異に関して説得的に概念化できなかったことの克服に向けて批判的な検討を臨む論考が求められた。

以上の立場から再帰的近代化論における副次的帰結の論理を手がかりにして、近代化ないしグローバル化の副次的帰結として気候変動のもたらす地球の有限性に基づく社会意識の形成にCTの記述理論的独自性を指摘した。その上で、本稿を通してなぜベックのなかにゆらぎがあったのかについても確認することができた。それはベック自身がコスモポリタニズム論に通底する規範理論の普遍主義的な側面を退けながらも、記述的な理論を構築したのちにそれがどのように社会と結びつくのかについて構想を重ねる上で、新自由主義的グローバル化とCTが差異化されるための批判理論的側面（規範）との板挟みに陥っていたのではないだろうか。こうしたジレンマは論者によっては理論的

行き詰まりにも見えなし、独自性として解釈することもできた。それらの論者においてもベックの立場性を無視しているわけではなかったもので、規範理論としての側面を重視していたことが窺える。

ただし、こうした規範理論的志向性が往々にして新自由主義的グローバル化とコスモポリタン化の差異を不明瞭なままにしてしまうといった問題もあり、その点で本稿ではまずは記述理論としてのCTの意義について確認ができた。

最後に今後CTがさらなる理論的妥当性を獲得するためには世界規模で社会意識が形成されることやその方法論について比較社会的視点から詳細な検討が求められるほか、この気候変動のリスクを焦点にそのなかにある差異として、経済格差や社会的不平等とどのように接続するのかに注意を払う必要がある。つまり、コスモポリタン化とグローバル化の接続について問い直すことである。そのほかにもまた、こうした試みは非人間としての自然を政治に参画させる企図を持つコスモポリティクス¹⁾の概念にも関与するため、その比較検討も必要になってくるだろう。ベックが構想したCTの理論的射程が問われるのはそれからである。いずれも今後の課題として別の機会に論考したい。

註

- (1) 詳しくはハーヴェイの「修飾語つきのコスモポリタニズム」を参照されたい (Harvey 2009=二〇一三)。
- (2) ただし、ベックは同理論を構想するなかで、自らの理論を「コンテキスト的普遍主義」と説明している。それは本稿で説明するコスモポリタニズム論の第一の立場にあるような一枚岩的な普遍主義へ向けられる批判を退けつつも、まさに「ローカルな差異と普遍的原理の結合」を目指す立場である。この点ではベックは第二の立場にあるとも言えるが、本稿ではとりわけベックがコスモポリタニズムを社会変容として捉えようと試みた構想を重視して第三の立場に位置づける。
- (3) ベックは「コスモポリタン主義を別の言葉で言い換えれば、ナショナリズム、共産主義、社会主義、新自由主義といった歴史的に使命を終えた理念にとつてかわる次の時代の偉大な理念ということになる」(Beck 2002b=二〇〇八:七)と述べながら、とりわけ新自由主義をグローバル化が進んだ現代社会における脅威とみなしている。その脅威とは新自由主義が世界経済における包摂と排除を決定する権力を持っていることであり、それが富の再分配による社会的な不平等の是正をもたらずどころか、むしろその拡大を進行させている現状を危惧している。
- (4) ただし、この言及はベックの理論に限らず、ハーヴェイが新たなコスモポリタニズムと称するコスモポリタニズム論全体にも通底する問題として提起されている。
- (5) ベックは新自由主義的グローバル化に対抗するコスモポリタン化への構想(コスモポリタンヴィジョン) (Beck 2004=2006)では、予期せぬ副作用として正義と人権を求める声が、他国への侵略を正当化するための血なまぐさい戦争に使われることによって、コスモポリタンの正当性が疑われることを懸念する。だからこそ真のコスモポリタニズムと偽のコスモポリタニズムを明確に区別する必要があるという。ここでは偽のコスモポリタニズムは、コスモポリタンのレトリックを、平和のレトリック、人権のレトリック、グローバルな正義のレトリックを、国家覇権主義の目的のために道具化するといった、最近の例としてイラク戦争を挙げる。コスモポリタニズムの思想には最初からイデオロギー的両義性が内在していることを警鐘している(Beck 2006)。
- (6) かつてベックがコンボ紛争におけるNATOのセルビア空爆を正当化した声明 (Cohen 1999) を引用しつつ、それとブレア、クリントンあるいはブッシュが行ったことを区別するのは困難であると痛烈に批判する。
- (7) ハーヴェイも同様にベックがコスモポリタニズムの物質的土台はすでに構築されており、足りないのはこうした現実に合致する適切な理論だけであると主張していることを指摘する (Harvey 2009=二〇一三:一五〇)。
- (8) 個々の連関についての体系的な論考については伊藤(二〇一九:一九九―二〇一)も参照されたい。
- (9) 規範理論としてのコスモポリタニズム、あるいは反省による自己言及がもたらす社会変容としての解釈は、ベックではなくてギデンズの再帰的モニタリングを想起させる (Beck et al 1994=一九九七)。
- (10) 齊藤弘久がコスモポリタンの集合的記憶について検討するなかで指摘しているように、こうした集合的記憶の受容は地域に

文献

- によって大きな差異がある（齋藤 2020）。
- (11) イザベル・スタンジェールにより提唱された概念。概念の整理についてここではスタンジェールによる以下の文献を参照されたい（Stengers 2004）。
- Beck, Ulrich, 1997, *Was ist Globalisierung? Irrtümer des Globalismus – Antworten auf Globalisierung*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag. (= 二〇〇五、木前利秋・中村健吾監訳『グローバル化の社会学——グローバルイズムの誤謬——グローバル化への応答』国文社。)
- , 2002a, “The Cosmopolitan Society and Its Enemies”, *Theory, Culture & Society* Vol 19, Issue 1-2: 17–44.
- , 2002b, *Macht und Gegenmacht im Globalen Zeitalter: Neue Weltpolitische Ökonomie*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (= 二〇〇八、島村賢一訳『ナショナリズムの超克——グローバル時代の世界政治経済学』NTT出版。)
- , 2004, *Der kosmopolitische Blick oder: Krieg ist Frieden*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag. (= 2006, Ciaran Cronin, trans, *The Cosmopolitan Vision*, Cambridge: Polity.)
- , 2006, “Living in the world risk society, *Economy and Society*”, 35 (3), 329–345.
- , 2008, *Der eigene Gott. Von der Friedensfähigkeit und dem Gewaltpotential der Religionen*, Frankfurt am Main, Suhrkamp. (= 二〇一〇、鈴木直訳『私だけの神——平和と暴力のはなみぎあそび宗教』岩波書店。)
- , 二〇一〇 a 「個人化する日本社会のゆくえ」ウルリッヒ・ベック／鈴木宗徳・伊藤美登里編『リスク化する日本社会』岩波書店、二四六・二七四。
- , 2011b, “Fresh Kidneys”, Michael Burawoy, ed., *Global Dialogue*, 1(3): 1–16.
- , 2016, *The Metamorphosis of the World*, Cambridge: Polity Press. (= 二〇一七、枝廣淳子・中小路佳代子訳『変態する世界』岩波書店。)
- , 1994, Anthony Giddens and Scott, Lash, 1994, *Reflexive Modernization*, Cambridge: Polity Press. (= 一九九七、松尾精文・小幡正敏・叶堂隆三訳『再帰的近代化』而立書房。)
- , and Elisabeth Beck-Gernsheim, 2011, *Fertilebe: Lebensformen im globalen Zeitalter*, Berlin: Suhrkamp. (= 二〇一四、伊藤美登里訳『愛は遠く離れて——グローバル時代の「家族」のかたち』岩波書店。)
- Blank, Yishai, [2011] 2014, “The Reality of Cosmopolitanism”, Ulrich Beck ed., Ulrich Beck: Pioneer in Cosmopolitan Sociology and Risk Society, Heidelberg: Springer, 65–69.
- Berger, Peter L., 1967, *The Sacred Canopy: Elements of a Sociological Theory of Religion*, New York: Doubleday & Co. (= 二〇一八、蘭田稔訳『聖なる天蓋：神聖世界の社会学』筑摩書房。)
- Cohen, Roger, 1999, *A Generation of German Pacifists Finds Itself at Odds over the Kosovo Air War*, “New York Times”, (16 May, 1999) (二〇一四年三月三十一日取得 <http://www.nytimes.com/1999/05/16/world/crisis-balkans-germany-generation-german-pacifists-finds-itself-odds-over-kosovo.html>).
- Harvey, David, 2009, *Cosmopolitan and the Geographies of Freedom*, New York: Columbia University. (= 二〇一三、大屋定晴・森田成也・中

村好孝・岩崎明子訳『コスモポリタニズム——自由と変革の地理学』(作品社。)

伊藤美登里、二〇一七『ウルリッヒ・ベックの社会理論——リスク社会を生きたということ』勁草書房。

——、二〇一九「なぜコスモポリタン化の語が造られねばならなかったのか——U・ベックのコスモポリタニズム論」『現代社会学理論研究』一三三・六—一八。

川端健嗣、二〇一六「U・ベック再帰的近代化論の成立背景」『社会学研究』九八・六—一八九。

Nussbaum, Martha, 1996, *For Love of Country: Debating the Limits of Patriotism*, Beacon Press: Boston. (=二〇〇〇' 辰巳伸知・能川元一訳『国を愛するということ——愛国主義(パトリオティズム)の限界をめぐる論争』人文書院。)

三上剛史、二〇一七「個人化論の位相」、ウルリッヒ・ベック／鈴木宗徳・伊藤美登里編、『リスク化する日本社会』岩波書店。

見田宗介、二〇一八『現代社会はどこに向かうか——高原の見晴らしを切り開くこと』岩波書店。

齊藤弘久、2020, "Unpacking Cosmopolitan Memory", Vincenzo Cicchelli and Sylvie Mesure eds., *Cosmopolitanism in hard times*, Brill, 221-232.

Stengers, Isabelle, 2004, "The Cosmopolitical Proposal," Bruno Latour and Peter Weibel eds., *In Making Things Public: Atmospheres of Democracy*, Cambridge, Ma.: MIT Press, 994-1003.

鈴木弥香子、二〇一四「コスモポリタニズムの検討——グローバル化時代の新たなオルタナティブとしてのアクチュアリティと困難性」『現代社会学理論研究』八・五—六七。

——、二〇一九「ウルリッヒ・ベックのコスモポリタン理論

の射程と限界——批判的継承に向けて」『現代社会学理論研究』一三三・三—三四。

——、二〇二三「新しいコスモポリタニズムとは何か——共生をめぐる探究とその理論」見洋書房。